地獄の御飯のたべられる

湯の宿から

永代美知代

萬壽代さん、夏の別府は暑かつた。やつぱり去年のやうに、下野の那須溫泉へ行つてた方が賢かつたかも知れません。何と云つても、此處は日本の南の、九州だものねえ。

でも、さすがに溫泉場です、汗が出ればすぐ浴槽に浸つて、すつくり好い氣持ちになる事も出來ますし、何よりも嬉しいのは、お湯が豐富で綺麗なことです。

湯の量の豐富な、それはもう世界でも餘り別府程の溫泉は無いさうです。別府の町にはね、到る處地面をつきさへすれば、溫泉が湧き出るさうで、別府名物の竹細工を商つてゐる九尺二間の商賈家でも、小學校でも警察でも、たつた一間つきりの汽車の旗振りの家にでも、何處にでも大抵お風呂が湧いて居ります。

ねえ、面白いぢやありませんか、汽車の旗振りの家にまで、お風呂が湧くなんて！

萬壽代さん、あなた驚いちやいけませんよ。私はね、昨日地獄で焚いた御飯を食べましたわよ。

嘘言なものですか、本當ですとも本當ですとも、もし如何してもお信じなさる事が出來ないなら、あなたも別府へいらつしやいな、そしたら私、あなたを地獄へ御案内して、地獄の御飯を差上げますわ。お互に死んだら屹度極樂へ行くに定つてますもの、せめて生きてゐるうちに地獄の御飯を頂いて置かない事には、生き代り死に代り、地獄の御飯のたべそくなひになりますわ。

ねえ萬壽代さん、地獄と云ふのはね、別府の町を離れて三里ばかりの、鐵輪と云ふ處にありますの。鐵輪の溫泉は澄み切つた、それは綺麗な溫泉ですけれど、何ですか、今ではもう餘り病氣にはきかないとか聞きました。ですけれど、世にも不思議な地獄と云ふものがある以上、たとへ溫泉の効能がないと云つても、別府へ來た程の人は皆、一度位地獄見物に來ないではおきますまい。

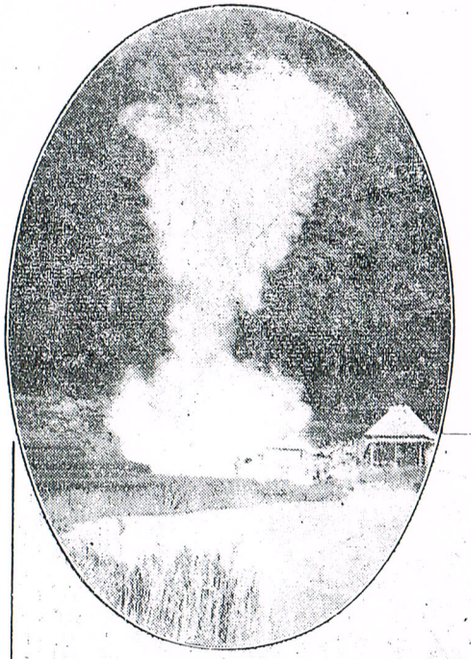
その昔、溶岩が盛んに噴出されたと見えまして、鐵輪への道は甚いでこぼこの、下駄なんぞはとても穿いてゐられない、誰でも草履で行くんです。そしてね、その砂地の一皮上には、もう直ぐ地獄の湯氣が一杯にもぢやついて居ります。

細い青竹を三本、いきなり砂地の中に突込んで、その上にお釜をかけたり、お鍋をのせたり、御飯も炊けば、おかずも煮ます。まるでまあ、歴史讀本の

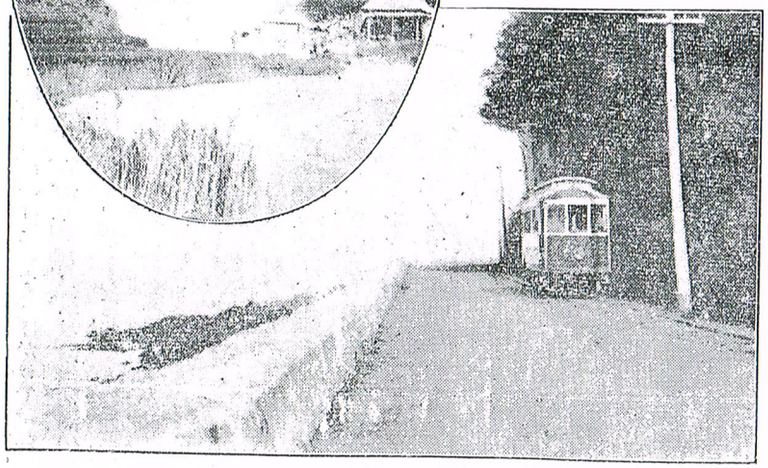
挿畫でよく見る護良親王が、足利氏の土牢に幽閉されてゐさせられる時、そのお傍に置いてある三本竹の燈灯ね、あゝした恰好なのよ。

卵なんかほんの三分間で立派なみぬきになりますわ、溫泉が鹽類泉で、蒸汽に鹽氣でもあるかして、さうしてうでた卵には食鹽を添える必要もありません、丁度頂き頃の鹽味がついてゐるのも不思議ぢやありませんかねえ。

そして血の池地獄、海地獄、坊主地獄なんて云ふ、氣味の惡いお湯の池が澤山ありますの。血の池地獄に眞紅な色よ、海地獄は見て居て眼がギラギラする程碧々しい、底の知れない凄さですし、坊主地獄はね、灰色のどろ〳〵した葛を煮立てたやうなものが沸き立つて居りますの、と云つたばかりでは、何だ葛位、高が小さなお鍋一杯のブツ〳〵ぢやないかと仰有るでせうけれど、萬壽代さん、大きな大きな池一面、ブツウリ、ブツウリ、音を立てゝ、渦を卷いてるんだと、あなただつて些少と不氣味でせう。おまけにね、どうかすると、大入道の頭ほどもあらうと云ふのが、一丈からの高さに湧き上つたりするんです。本當に私怖かつてよ。



（別府溫泉の海地獄）



（別府附近鐵輪の景）

何でも此地獄が別府溫泉の大源に違ひないと思はれますわ、烈しい勢で水蒸氣が昇つてると見えまして、晴れた日なんぞ、三里も離れた別府からでも、よくその水蒸氣が見えますよ。

私ね、宿の三階の欄干にもたれて、濃い水蒸氣で、一目でそれと知れる鐵輪の空を跳めるのが好きですの。

三階の欄干と云へば面白い話がありますわ、私の泊つてる此宿はね、去年の秋三階を新築したばかりで、そこには都會から來た人達が主に居ります、以前からあつた主家は二階だけを客室にして、薄暗い下座敷には、別にお客も入れてない樣子でしたがね、此間、ふと私が三階から下を見てゐると、十二三の女の兒と、その姉らしいのと二人、淺黃つぽい染地のお腰を出して、洗ひ晒しの紺飛白の裾をめくつて、青竹で編んだ網代の籠に臥た四十恰好の男を介抱して居りますの。

網代の籠と云ふと、大層立派なやうに思はれますが、實物はね、本當に荒つけないものでして、竹の網代を三枚寄せて三角形にとぢ合せ、中へ病人を臥かして、上の處へ竹竿を突き込み、何處へでも擔いで行かうと云ふ、見て居て病人に氣の毒な程、お粗末なものですの。

はじめ私は、宿の病人かしらと思つてゐましたらばね、女中の話で、それは佐伯と云ふ處から來て居る客人ださうです。病人は二人の女の兒の父親で、久しい間、脊髓を病んで居るのだと聞きました。

一體、佐伯の人達の湯治と云ひますと、それは不思議な一種違つた方法ですの、自分の持船の傳馬船の中へ、その人達の常食にしてゐるカンコロと云ふ甘藷の粉を積み込んで、別府の港にもやつて居ましてね、溫泉に入るために、ちよい〳〵陸へ上つて行つたり、散歩に出掛けたりするばかりで、御飯は船で頂きますし、臥るのは勿論の事船の中です、さうして些少も宿屋に泊るとか、無駄なお金を費ふとか云ふ事はしませんのよ。

尤も一口に佐伯の人と云つても、餘程のお金持ちとか、ハイカラ好みとか、さうした例外はありませうけれど、概してまあ、非常にしまつな、質朴な人達が多いのですね。

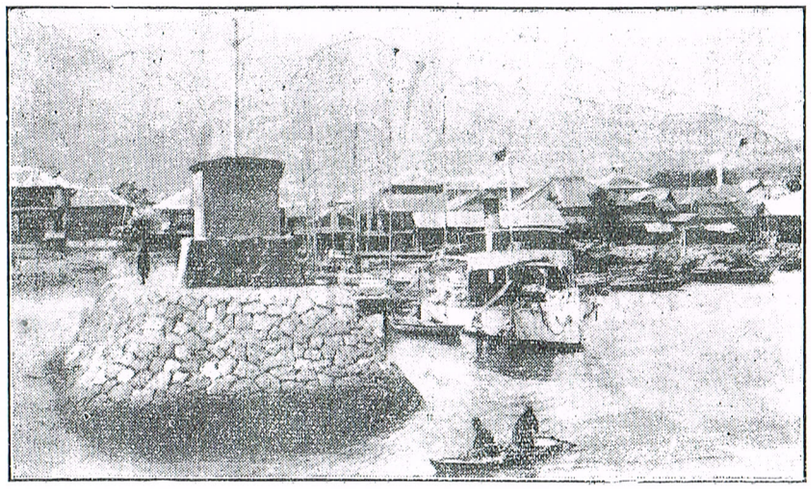
脊髓を病んでゐるあの病人も佐伯の人ですから、佐伯風にやつぱり、持船の傳馬に乘つて、久しい間人湯してゐたのでさうです。船から溫泉まで網代の籠に乘りますと、二人の娘達が附添ふて、えんやら、えんやら擔いで行きます。ですけれど、何しろ身動きの出來ない大病人ですから、娘達は堪らなく傷々しくもなつたのでせう、無理から父親を說き伏せましてね、とう〳〵宿につくことにもなつたのだと云ひま

すわ。

萬壽代さん、あれ程の大病人でゐて、あんな薄ぐらい陰氣な下座敷に寢起する、まあ、考へても御覽なさい、あなただつて私だつてこんな風に我儘一杯、贅澤に馴れ切つてゐますから、考へただけでも、ぞつとする程嫌だわね。

ですけれど世の中には贅澤のしたい三昧の出來る人達ばかりはありません。下座敷は此三階と違つて、それは陰氣なところですけれど、それでも窮屈な狹苦しい船の中に比べたら、どんなに又晴々と好い事でせう。それに遠い處を外の溫泉に行かなくたつて、宿の內湯がありますもの、同じ網代の籠に乘るにしても、つひ目と鼻の間だけなら、自然病人の體も幾らか樂に行くでせう。

萬壽代さん、私ね、バナナだの



（別府の港）

梨だの、折々買つては、下の座敷へ女中に持たせてやりますの、すると屹度そのたんびに、姉と妹と二人でわざわざお禮を云ひに來ますがね、それは兄るからに律氣らしい人達よ。

萬壽代さん、二人の娘をあなたも御覽なさりたいでせう。せめて名前だけでもお知らせすると好いのですけれど、私まだ知りませんもの、仕方がない。

だつて、私のやうな我儘者の不孝者はね、つひ氣恥かしくなつて、折角室へ來て臭れた姉妹に、打とけて口をきく事も出來なくなりますの、心の中では、本當に慕はしい人達だと思つて居ますのにねえ。

萬壽代さん、あまたも別府へいらつしやいませんか、地獄見物も面白いけれど、今の世に珍らしい親孝行の姉妹と、御一緒にお友達になりませうよ。ねえ、さようなら。